たまには子猫のように

たまには子猫のように

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=17066862

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム

激甘ヒュンマ。
猫の日だからの、突発作品。日付変わっちゃっていますが…。
2022.2.22という奇跡の猫の日を記念して✨✨

ただぬるいいちゃいちゃが続いているだけの、ヤマもオチもない作品の上、猫でいいのかといろいろと突っ込みどころはありますが、大目に見てください💦
さらに、このシリーズでいいのかも考えものなのですが、シンコンネタはみんなこのシリーズなので、とりあえずここに入れました。

Table of Contents

たまには子猫のように

　ヒュンケルがベッドに腰を下ろすと、マァムが彼に、甘えるようにすり寄ってきた。
　既に彼女はベッドの上に上がり込んでおり、ぺたんと腰を落として座り込んでいた。そんなマァムが、膝でにじりながら彼に近づいてくる。
　マァムは、彼の右の肩口に額を寄せると、そのまま顔をこすりつけるように頭を左右に動かした。両手は拳のかたちのまま、彼の胸元に押し当てられていた。
　マァムがこんな甘え方をするのは珍しいな。
　ヒュンケルはそう思いながら苦笑した。
　マァムの仕草は、野生と家畜の間のような、つかず離れず側にいる、気まぐれな小さな動物を思い起こさせた。
　ヒュンケルはつぶやいた。
「猫みたいだな。」
「そう？」
　マァムが不思議そうに尋ねると、ヒュンケルが頷いた。
「ほら、猫が甘えるときに、膝や手に頭をこすりつけてくるだろう？」
「ああ。」
「それみたいだ。」
　そう言って、ヒュンケルは、マァムの柔らかな髪を撫でた。まるで、甘えて縋ってくる猫をあやすかのように。
　すると、その言葉に合点がいったのか、マァムは、甘えた声で彼に尋ねた。
「・・・猫なら、かわいがってくれる？」
　ヒュンケルはふっと息を吐いて笑みを漏らした。瞳がいっそう、穏やかに揺れる。
「猫でなくても、かわいがるさ。そうしているだろう？」
「ならこうしちゃえ。」
　その言葉に貫かれ、マァムは恥ずかしいのか、ますます冗談めか

して自分の額を彼の肩口に押し付けた。ごしごしと頭を横に揺らす。
　ヒュンケルは、苦笑した。
「おいおい。
　俺はお前の縄張りか？」
　不意に飛び出た場違いな言葉に、マァムは尋ね返した。
「縄張り？」
「猫は知らんが、動物がそうやって体をこすりつけるのは、縄張りににおいをつけて、自分のものだと示すためだ、と聞いたぞ。」
　それを聞くと、マァムは少し考えこむように沈黙した。
　だが、それもわずかな間のこと。マァムは、悪戯めいた口調でつぶやいた。
「・・・縄張り。いいかも。」
　彼女らしくない言葉に、ヒュンケルは首を傾げた。先ほどからの彼女は、いつになく、珍しい仕草や言葉を使う。
「どうした？」
　すると、マァムは、ヒュンケルの肩口から少し額を離し、上目遣いに、ちらりと、彼を仰ぎ見た。幼い仕草をする今日の彼女が、拗ねたように彼を見上げる。間近い距離で、二人の視線が絡み合った。
　マァムは、わずかに口をとがらせ、ほんの少しの不満を浮かべながらつぶやいた。
「・・・だって、ヒュンケルは素敵なんだもの・・・。」
「は？」
「あなたのこと、素敵だなあって目で見ている女性、何人もいるわ。私、知ってる。
　しょうがないって思うんだけどね。
　だって・・・本当に素敵なんだもの。」
　そうしてまた、マァムは彼の肩口に顔をうずめた。
　思いもかけない彼女の言葉に、ヒュンケルは驚いた。だが、わずかな不満を浮かべて彼を見上げた彼女の仕草がこの上なく可愛らしく、愛おしかった。
「なんだそれは。やきもちか？可愛らしいな。」

そう言って、ヒュンケルは、彼女の肩に右腕を回し、もう一方の手で彼女の髪を撫でながら、その耳元でささやいた。
「俺がお前以外を見ていると思うのか？」
　その熱のこもった声に身を震わせ、マァムは彼の胸に当てた両手で、ぎゅっと、彼のシャツをつかんだ。顔をあげないまま、彼に答えた。
「・・・思わない。」
「わかっているじゃないか。」
　それだけ聞ければ満足、と言いたいところだが、ヒュンケルはマァムに言い返したくなった。
「それを言うならお前こそ、気付いているのか？」
「何を？」
　マァムが彼を見上げ、不思議そうに聞き返してきた。ヒュンケルは、先ほどのマァム同様、少し不満げな表情をわざと浮かべながら、言葉をつづけた。
「お前のことを、熱っぽい目で見ている男が大勢いる。王都に出かけたりすると、そういう視線がいくつも、お前に向かって注がれている。
　気付いてないだろう？」
「うそ・・・。」
「俺はお前の方がよっぽど心配だ。」
　初めて聞いたかのように驚く彼女に、ヒュンケルは大げさにため息をついた。
「気をつけろよ。」
　そう言って、彼女の髪をくしゃくしゃと、その大きな手で撫でた。
「はーい。」
　マァムの素直な返事に、ヒュンケルは満足げに笑みを浮かべた。
　そのまま、彼はしばらく、右半身に彼女をもたれかけさせ、その髪を撫でていた。
　マァムも、心地よさげな表情のまま、彼にされるがままになっていた。
　そのまま、穏やかな時間が流れていく、そのはずだった。

不意に、ヒュンケルはつぶやいた。
「・・・縄張りか。それもいいかもな。」
「え？」
　マァムが顔を上げるより早く、ヒュンケルは、マァムから体を離すと、その襟元を大きくはだけさせた。
　そして、瞬く間に、彼は、マァムの首元にその唇を寄せた。
「・・・！ヒュンケルっ！！」
　マァムの抗議の声が聞こえたが、もう止まらなかった。
　マァムは、首元に小さな痛みを感じた。
　一瞬の後にヒュンケルが唇を離す。
　マァムが見下ろすと、鎖骨のすぐ下に、赤い花びらのような痕が付けられていた。
　ヒュンケルが、挑戦的な眼差しをマァムに送った。
「これで、誰の縄張りかはっきりわかるだろう？」
　その言葉にマァムは頬を赤らめ、ヒュンケルに文句を言った。
「・・・もう！また痕つける。」
「嫌か？」
「・・・ここなら服で隠れるからいいけど。」
　すると、ヒュンケルが呟いた。ひどく熱っぽい声だった。
「隠さないでくれと言ったら？」
「えっ・・・。」
　戸惑い、言葉を返せないでいるマァムに対し、ヒュンケルは笑みを浮かべた。
「冗談だ。」
　そう言われてもまだ戸惑ったままのマァムを、ヒュンケルは愛おし気に見つめ、そっと抱き寄せた。
　そして、その耳元で、ささやいた。
「猫はもう終わりか？」
　その言葉の意味を感じ取り、マァムは彼の胸に縋り付いた。
「・・・猫じゃなくていい。」
「そうだな。俺もそれがいい。」
　そうして、彼は、いっそう強く、その愛おしい新妻の体を抱きしめた。

彼の言葉が、魔法のように、マァムを猫から戻す。
その先に、二人の時間が続いていた。